

第1回下川町林業振興審議会 会議録

日 時 令和2年12月4日（金）午後7時分～午後9時

場 所 役場4階中会議室

出席者 板橋太郎会長、麻生翼委員、越智光司委員、杉野諒輔委員、田中由紀子委員、
田邊真理恵委員、三津橋弘茂委員 計7名

谷町長、栗原課長、山本主幹、齋藤主査 計4名

1 開 会

2 下川町林業振興審議会委員委嘱状交付

3 町長挨拶

下川町は、明治34年の開拓以来、120年の歴史を積み重ねてきた。開拓者のご苦労されて切り開かれ、農業を営われ、さらに森林資源が豊富な下川町で林業・林産業が誕生し、生業として発展してきたところ。

しかし、戦前・戦後と厳しい時代を通り超え、戦後の産業構造の変化や時代の潮流の中で、過去には30社ほどの加工工場が現在は8社9工場となり、林業・林産業も非常に厳しい状況になっている。

町としては農業とともに林業・林産業は地域の基幹産業であり、無くすことのできない産業であり、林業・林産業事業者の努力を基調としながら、町としても平成22年度に林業振興基本条例を制定し、総合的な施策を講じてきた。

それから約10年経過する中で、高性能林業機械導入や木材加工機械・施設整備に対する補助金を5億2千万円ほど町から支援することができ、林業における年間の製造出荷額も当時の23億円から27億円を超えるまでになった。

地域の林業・林産業は主要たる町の産業として、今後も必要な産業であり、地域の経済や住民の暮らしに寄与していくと確信している。

一方、現在は新型コロナウイルス感染症の拡大が懸念されている中、木材需要については若干の回復傾向にあったものの、今後の感染状況によっては先行きが不透明な状況となっている。

この状況が悪化していけば、町としても対策を応じていく必要性も考えられる。

この審議会において、今後の地域林業・林産業の在り方や林業・林産業事業者の経営改善・経営革新というところにもご意見やご指摘をいただき、更なるまちの発展を目指して参りたい。

今後とも皆様のご協力とご支援をお願いしたい。

4 会長・副会長選出

会長に板橋太郎委員、副会長に三津橋弘茂委員に決定

5 会長挨拶

皆さんと議論しながら良い答申を作成していきたいので、よろしくお願ひしたい。

6 諮問

「森林総合産業構築に向けた地域林業・林産業の在り方について」

7 議案

(1) 審議会審議内容・スケジュール（案）について

事務局：資料に基づいて説明

委員：特になし

(2) 前審議会の審議経過について

事務局：資料に基づいて説明

委員：特になし

(3) 下川町の林業・林産業の状況について

事務局：林業関係の現状分析資料に基づいて説明

委員：町有林の資源構成について、今後1齢級200haあたりに落ち着くとのことだが、町として最低どれくらいで困ってしまうのか、今はどういう状況なのか。

事務局：民有林全体として、年間20,000 m³～25,000 m³の木材を今後も安定して供給していきたい。そして、今後さらに供給量を増やしていきたい考え。しかし、近年は伐っても苗木が不足して植えられない状況や植付けの作業班が少ないことが課題であり、前回の答申にあったように建設業との協同などで解決していく必要がある。

委員：このままの資源量で大丈夫なのか。

事務局：10～12齢級の資源量が非常に多い齢級であるが、伐採時期に到達したからすべて伐ることにもならない。少しずつ延命しながら今後も使い続けていくことになる。

委員：太くなりすぎて加工側で困らないのか。

事務局：木を伐る事業者も木を加工する事業者も大径材の取扱いには課題があり、まさに審議会の中でも今後大径材の利用に向けてどう対応していくか検討課題の一つである。

委員：今後カラマツよりもトドマツが中心となる資源構成だが、こんなに波があって大丈夫なのか。

事務局：下川町の民有林だけでなく、全道的にも同じ資源構成と言える。

北海道としても今後トドマツをどう利用していくか検討されている。

委員：今後の造林は、カラマツとトドマツが半々となるように考えていくのか。

事務局：次の世代に資源を残すためにも、そのように考えていきたい。

委員：町有林の循環型森林経営は、町の公式として50haの60年サイクルで3,000haとしているが、ここ10年の造林実績では40haにも達していない状況で、今後も50haとしていくのか。

事務局：担当課としては、50haの60年は理念として否定するものではなく、そこを目指していきたいと考えている。

委員：理念として今後も掲げていくのであれば、どうしたら50haにしていけるのか、あるいは最近大径材は求められなくなっていることを踏まえて、50年サイクルとしての理念に解釈していくなどについて、議論していくべきか如何か。

事務局：理念通り毎年50ha伐っていこうとすると、若年齢級の面積が足りなくなっていく状況にあることや、資源量的に同じ林齢であっても成長にばらつきがある状況となっている。資源量的には今後もまだまだ間伐をして木を成長させていく時期にあると考えている。

事務局：循環型森林経営の目的は、地域への木材の安定供給と雇用の安定化である。町有林の10年前の素材生産量は年間約7,400 m³、現在は年間10,000 m³前後で推移している。50ha伐採していない年もある中で、資源量の多い場所を設定するなど工夫しながら安定供給に努めているところ。

事務局：一方で議会からも同じように循環型森林経営の在り方について指摘を頂いているところであることから、審議会の中でもご議論頂ければと思う。

委員：大径材を町外に売るという選択はあるのか。

事務局：大径材の主な利用は合板用になるので利用先は町外となる。循環型森林経営の理念で全量地域へ供給しているところではあるが、町民への売上を還元する観点で言うと、出てきた材を有利なところに売り、しっかり捌くために町外に売るという選択肢も考えられる。民間でも同じ考えだと思うが如何か。

委員：その通りである。

委員：大径材が今後増えていくとなれば、製材工場に対応できるように改良していく考えはあるのか。

委員：現時点では、大径材に対応していくよりも、町外から細い木を集める方が現実的である。

事務局：林産業関係の現状分析資料に基づいて説明

委員：製材工場がラミナーを挽いて集成材工場で加工した場合、製材工場と集成材工場両方の製造出荷額が入っているのか。

事務局：全事業所の製造出荷額となっている。

委員：製品ごとの製品販売量としてm³数で整理されているが、販売額で整理できるのか。

事務局：販売額での整理も可能である。

委員：家具やクラフトだと、なかなか材積では出せない製品なので、販売額でも整理して欲しい。

事務局：販売額でも整理を行う。ただし、これまで林業・林産業振興事業で対象となる事業者を調査対象としており、木工作家は対象としていない。

委員：町の調査であれば調査対象とすべきではないか。

事務局：調査の協力に応じてくれれば可能と考える。

委員：木工作家は林業者ではないのか。

事務局：これまでは想定していなかったので対象外としているが、条例上の定義である林業者の範囲を広げてはという話もあるので、議論いただければと思う。

委員：お客様からこの木は何になるんですかと良く聞かれる。トドマツは一般的に梱包材や安いものになる印象があるが、全道や町内で見た時に違いがあるのか。全道はこうだけど、下川町の場合は違うのか。傾向が同じなのか違うのか。また、集成材はトドマツのフローリングなどの内装材があるが、全道的に珍しく付加価値が高いのか教えて頂きたい。

委員：造作用の集成材であれば㎡あたりざっくりで 30 万円程度。

事務局：資料の 9 万円/㎡は主に柱材の価格である。

委員：道内でカラマツ集成材を作っているのは下川くらいではないか。

事務局：道内の集成材工場は何社くらいか。

委員：5 社くらいである。

委員：造作用集成材は、下川以外やっていないと思う。

事務局：下川の工場では、多品種で多様な製品をオーダーで作られており、需要があると聞いているが、その分コストもかかると聞いている。

事務局：町内のトドマツ利用は、構造用の集成材も加工している。

委員：最近ではトドマツの白さが若い世代に人気があると聞く。旭川でもトドマツ利用に向けて取り組んでいたが、加工の際に曲がったりしたり、価格を下げれないなどの課題で頓挫している状況。トドマツを扱っている中で、こんなものに加工しているよと発信できればと思っている。

事務局：トドマツの材質は柔らかいので、壁材などの利用であれば広がりが出てくるのではないか。また、一の橋の薬用植物研究施設では、トドマツの無垢材を構造や床などに使用しており、トドマツプロジェクトとして研究されている。

委員：去年であれば、関東の病院の内装材すべてトドマツで、ランダムに 3 パターンのルーバーに使用した実績がある。

委員：これからはトドマツの利用が主体となっていくかもしれない。

委員：しかし、トドマツは日焼けすると黄色くなる傾向がある。

委員：カラマツも日焼けして赤くなるが、トドマツの黄色い日焼けは特に目立ってしまう。

委員：トドマツの天井は非常に良い。

委員：トドマツの天井は高いのか。

委員：トドマツの羽目板が一番高く、それこそ㎡あたり 30 万円程度する。

委員：付加価値の高い製品を是非、下川町で作って欲しい。

事務局：分析として、樹種別の品目を整理することは可能である。

委員：傾向として町外の製品と下川の製品はこんなものが高いか整理できないか。

事務局：町内外の製品の価格差の分析は難しい。

委員：製品販売量構成比率の円グラフにある製品の利用先が知りたい。

事務局：調査することは可能だが、事業者の負担的に如何か。

委員：回答することは可能だが、数字を出すには時間がかかる。

委員：数字ではなくて品目で良い。

事務局：例えば製材品の内訳は、梱包材、ラミナー材、構造材とか。

事務局：調査票に樹種ごとの主要な製品名を記載していただくよう検討する。

委員：アカエゾマツの利用が増えているが、何に利用されているのか。

事務局：近隣は一般的に太い材も含めパルプ材や燃料材になっているが、町内では近年、製材工場で一般材の価格を付けて加工していただいております、下川ならではの利用となっている。

委員：30年前のアカエゾを植えたブームは何だったのか。

事務局：その当時は確か北海道が奨励したと聞いている。天然のアカエゾマツやエゾマツが非常に高価で取引されていたようで、将来的に資源が無くなる恐れがあり人工造林で植えていったようである。

委員：今もエゾマツを植えているのか。

事務局：エゾマツは苗を作る技術が難しく、一時途絶えそうになった時があり、森林総合研究所や林業試験場で良いエゾマツの育種法と育苗法を改めて確立し、種苗会社に伝授した経緯がある。私有林はほとんど植えていないが、町有林ではある程度の資源量確保の観点で少し植えている状況である。特性としてある程度真っ直ぐ伸びてくるが、20年を経過すると雪害でポキポキ折れてくるのが過去にあったようである。

事務局：町有林では60年生のエゾマツ人工林が溪和に1ha程度存在しており、30cm近くまで成長している。

(4) 森林総合産業の構築に向けた取組状況について

委員：本日の資料全体的に内容が面白くて、ちゃんと知りたいなと思った。

森林環境教育で下川町がどういう取組み方をしているか子供達の方が知っているのではないかと思う。例えば移住して来た方とか大人が知れるような仕組みなり、場所なりあったら良い。自分も学びたいと思った。

(5) 地域林業・林産業の状況、課題等について（意見交換）

※(3)で意見交換でき、時間も超過気味であったため意見交換を省略。

事務局：下川町林業振興基本条例の施策について説明

委員：前回の条例改正では私有林整備事業の見直しが無かった。前回審議会でも、今抱えている私有林の課題について議論があまり無かった印象が残る。

近年は若い世代でも山を持ちたい人が結構いるが、必ずしも経済林を持ちたい訳でもない。私有林がどうあるべきか、今ある課題について掘り下げて議論をお願いしたい。

事務局：必要に応じて資料を提示したい。是非、今後議論をお願いしたい。

8 閉 会

事務局：次回までに何かお聞きしたいことがあれば、事務局までご連絡をお願いしたい。また、本日も議論頂いた内容を踏まえ論点を整理するので、その内容について次回議論をお願いしたい。

会 長：以上で第1回審議会を終了する。